

## 公開講演会記録

## ハワイ日系二世の記憶

NPO法人NAC—J代表／映像プロデューサー 松元裕之



2018年は、様々な面で節目の年となった。最も大きなトピックとしては、永く続いた江戸幕府の時代が終焉となり、明治へと元号が変更された年から150年ということである。また、2018年に大きな地震被害を受けた北海道も、命名から150年の節目の年となった。その多くの節目の年の中で、あまり日本国民に知られていない、あるいは、関連性が低く注目度の高くないであろう出来事が、日本の移民開始から150年の節目の年である、ということである。

私の活動は、ハワイの日系人の歴史を日本人に伝え、ハワイの日系退役軍人会が中心となって非営利で運営するKansha Preschool（カンシャ・プリスクール＝感謝保育園）をサポートし交流すること

にある。しかし、移民が排出された地域は、日本全国というよりも限定的な地域であり、1924年に施行されたアメリカの「排日移民法」によって、すでに移民が禁止されてから100年近くの歳月が経っていることもあり、現代の日本人には、ハワイ移民の末裔である日系人というのは馴染みがないかもしれない。

そこで、講演会で時間がなく詳しくお話できなかった映画『Go for Broke! ハワイ日系二世の記憶』制作のきっかけや経緯、二世について記す前に、まずは、ハワイへの日本人移民の始まりと歴史について、知っておいていただこう。

## ■日本の移民はハワイから始まった

時は江戸末期。オランダ系アメリカ人の商人「ユージン・ヴァン・リード」は、日本からの親米使節団（咸臨丸）の訪米を知り、日本とのビジネスをすべく日本に向かう。その途上、王国だったハワイに寄り、時の王カメハメハ5世に謁見した。当時すでにサトウキビ産業が盛んになっていたハワイでは、労働力としての移民を欲していた。

そこでヴァン・リードは、日本から300名の移民を連れてくるための移民輸送費用と手数料を、ハワイ王室から前もって受領し、さらにハワイ王国の領事代理の権限を携え日本に渡った。そしてハワイへの移民交渉に奔走し、江戸幕府との移民契約に成功した。しかしすでに徳川幕府から政権を移譲された新政府は、こ

の契約は旧幕府政府の下で結ばれたものだとして、契約は無効とし移民を禁じた。

一方、ヴァン・リードは、ハワイ王朝からすでに移民輸送費などを手にしていたこともあり、1868年5月17日未明の暗いうちに、出航を強行してしまった。そして移民約150名を乗せた「サイオート号」は、ひと月あまりの航海を経て、同年6月20日にホノルル港に到着した。

これが、日本で最初の集団移民であり、ハワイに着く間に日本の元号が明治に変わってしまったため、明治元年に移民した人々ということから、後にハワイでは「Gannen-mono（元年者）」と呼ばれるようになった移民たちである。

ただし、サトウキビ耕地での契約労働者として渡ったこの移民たちだが、実際には農業経験者が少なく、職人やあぶれ者、はては禄を失った武士たちも数名いた。

さらに日本とは大きく違う熱帯気候に加え、低賃金や劣悪な生活環境に耐えきれず逃げ出す者も出る始末だった。そのため、同年12月には、移民たちが明治政府に救済を申請した。

これを受け明治政府は、



キビ土起こし（サトウキビ耕地の土起こし。マウイ島ブウネネ）

ハワイ王国と協議の末、これらの移民が日本政府の許可なく違法にハワイに連れられて来たことを盾に、日本への帰国を望む者は日本に連れて帰り、アメリカへの再渡航を望む者にはハワイ王国の負担でアメリカへ行かせ、ハワイに残る者の環境改善を認めさせた。

この件があつて以来、明治政府は諸外国からの移民要請を断り続けていたが、そこに、1881年、ハワイ第7代国王「デイヴィッド・カラカウア」が世界一周の視察旅行の途上、開港したばかりの横浜港に、開港以来、初の外国国家元首として寄港し、明治天皇との謁見を果たした。謁見の際にカラカウアは、自身の姪「カイウラニ王女」と明治天皇の甥である山階宮定麿王との婚姻を提案したが、アメリカとの関係を考慮し、この提案は丁重に断った。

一方で、ハワイへの移民の要請に対しては迅速に対応し、1885年に国家間



開墾する一世（耕作地の造成のために開墾する一世。ハワイ島）

の正式な契約移民「官約移民」945名が海を渡った。ここから、日本の正式なハワイ移民がスタートすることになる。官約移民は、1894年まで26回行われ、のべ2万9000名あまりが海を渡った。その後、ハワイが共和制になると、民間の移民会社に委託され、ハワイ王国が消滅しアメリカの属領となる1900年まで続いた。ここまですべてが所謂「契約移民」で、アメリカの属領となった後は、アメリカの法律が適用され、奴隷のような契約移民は表面上なくなり、「自由移民」として海を渡ることになる。

しかし、アメリカ本土における日系移民数の増加や、勤勉さによって白人の仕事を奪ってしまうことなど、日に日に日本人移民への風当たりが強くなり、国家関係を危惧した日米政府は、1907年に日米紳士協定を結び、新たな移民を入れないようにした。

紳士協定締結後は、所謂「呼び寄せ移民」という、在米移民の家族などと呼び寄せる移民だけが認められた。なお、移民は独身男性が多いため、この紳士協定の「米国既在留者の家族は渡航可能」と

いう抜け道を適用し盛んとなったのが、有名な「写真花嫁 (Picture Bride)」である。この写真花嫁によって、およそ2万5000人の日本人女性が海を渡ったと言われている。そして、1924年のアメリカ移民改正法の成立によって、日本からの移民は、全面的に禁止となる。

## ■第二次世界大戦と二世

1924年のアメリカの移民法改正による移民全面禁止までに、ハワイとアメリカに渡った日本人の数は、およそ20万人とも言われている。

それに加えて、呼び寄せ移民時代になって写真花嫁による日本人女性が移民すると、爆発的に日系の人口が増えた。

1910年のハワイの人口は、およそ19万2000人だが、1920年までの10年間で6万4000人増え、その後の10年間には、なんと11万2000人も増えている。そしてその40%以上が日系人となっているのだ。

昔の日本の家庭は多産だった。それはハワイに移民しても同じで、多くの家庭は、6人〜9人の子どもがいるのは当たり前だった。私の映画で証言する二世たちの多くは、1920年代生まれで、兄

弟の人数は、9人兄弟が最も多かった。人口の多さもあるが、勤勉で懸命に働く日本人移民は、着実にハワイ社会の大きな1ピースとなっていた。

しかし、ハワイの日系人の立場をどん底に貶めてしまう出来事が起こる。もちろん、1941年12月7日（ハワイ時間）の旧日本海軍による真珠湾攻撃である。

この真珠湾攻撃による日米開戦によって、ハワイの日系人の立場も大変厳しくなった。米本土では、多くの日系人が住んでいた西海岸と内陸部の日系人が全員強制収容された。名目上は「西海岸の防衛」と「日系人の保護」であったが、事実上の収容・収監・隔離であった。

一方、ハワイでは人口が多すぎたためハワイの経済が成り立たなくなるから、と強制収容が行われていないといった思い違いがされているようだが、ハワイの日系人も強制収容されている。その業種は、マスコミ、教育者、宗教家、企業の幹部、日系団体の役員などで、人数としては1500名あまりと言われている。

真珠湾攻撃当日から収容が始まり、離島の場合は、いったん刑務所施設に収容され、その後、オアフ島南部のサンドアイランドに建設された収容所に入れられ、米本土の収容所に送られた者もいるし、オア

フ島内陸部に建設された「ホノウリウリ強制収容所」に収容された者もいた。ちなみにこの「ホノウリウリ強制収容所」は、終戦前に太平洋戦線で捕らえられた日本人PW（戦争捕虜）などを収容する施設となった。そのため終戦後は、ハワイの人々の記憶から消え去ったが、2002年に再発見され、2015年には当時のオバマ大統領により国定史跡に登録された。

## ■アメリカへの忠誠を示す二世たち

日米開戦より1年前、1940年から始まったハワイ・ナショナルガード（ハワイ州兵）の徴兵により、開戦時には1400名あまりの二世たちがハワイ・ナショナルガードに属していた。しかし、アメリカ陸軍は敵国である日本の血を有する二世たちを危険分子だと決めつけ、すべての二世兵をスコフィールド兵営に集め武器を取り上げた。さらに行き先も教えられず貨物船に乗せられアメリカ本土に送られた。そしてウイスコンシン州のキャンプ・マッコイで訓練生活に入り、第100歩兵大隊となった。しかし結成当初は、所属する上部組織がなかったため、大隊名のあとに（Separate II 分離）と付記されていた。

第100大隊の訓練の成績は、ずば抜けたものだった。白人兵と比べると体の小さな二世たちであるが、俊敏性に優れ、手先の器用さでも群を抜いており、銃器の解体再組み立てでは、掛かった時間は白人部隊の半分以上の速さで、この数字を見た陸軍上層部は、大変驚いたという。そして何より、高い教育を受けていた者も大勢いた。

この第100大隊の訓練成績の良さと、二世たちの嘆願、そしてハワイの社会奉仕活動家たちの働きかけにより、大隊規模より1ランク大きな連隊組織として、第442連隊が結成されることになった。1943年1月のことである。

アメリカ陸軍は当初、アメリカ本土の二世たちから3000名、ハワイの二世たちから1500名の兵士調達を考えていた。しかし蓋を開けると、アメリカ本土の二世は800名しか志願がなかったのとは逆に、ハワイからは定員の6倍を超える1万人もの志願があった。そのため陸軍は、人数を逆転し、本土で再募集をかけ1200名を集め、ハワイからは2600名の二世たちを入隊させた。こうして、アメリカ軍史上最も勲章を受けた伝説の陸軍部隊「第442連隊戦闘団」が結成された。

当時のホノルル商工会が行ったハワイでの壮行会には、兵士の家族と市民が1万人も集まり盛大に見送られた。第100大隊が、誰にも行先を告げることなく秘密裏に本土に送られたのとは全く対照的な結成である。



Hawaii442 (ホノルル商工会主催の壮行会「アロハセレモニー」  
1943年2月ホノルル)

### 『ゴッフォブロック!』

第442連隊がヨーロッパ戦線に送られたのは、1944年6月である。その前にすでにヨーロッパ戦線でドイツ軍を相手に戦っていた第100大隊は、目覚ましい活躍を見せていたが、その分、犠牲者も多く出していた。そのため、陸軍内では「パープルハート大隊(戦死傷章大隊)」と呼ばれており、陸軍内での評価もウナギ登りだった。第100大隊は

組織的に第442連隊内の第1大隊として併合されたが、それまでの功績により、100という数字が残された。

こうして連隊規模の組織となった二世部隊は、その後もドイツ軍を相手に、他の部隊とは比べものにならない活躍を見せ、多くの将軍たちが欲しがらる部隊となった。二世部隊を最も有名にしたのが、「ロスト・バッテリー・レスキューミッション(失われた大隊救出作戦)」である。これは、司令部の判断ミスによって、敵軍に囲まれてしまったテキサス大隊を、同大隊が所属する上部組織ではなく、全く関係のない第442連隊が救出する羽目になってしまった作戦である。

この戦闘により、第442連隊は、大きな犠牲を払った。211名のテキサス兵を救出するために、二世部隊は実に800名の死傷者を出したのである。この戦闘は、現在でもアメリカ陸軍10大戦闘に記録されており、陸軍のみならず、海軍でも第442連隊の歴史と功績は必須教科科目となっている。

アメリカ軍では、第442連隊を「Most decorated military unit (最も装飾勲章を受けた部隊)」とも呼んでいる。日系人部隊全体で授かった勲章の数は、1万8414章と米軍内でも突出してい

るが、一方で死傷率314%という信じられない数字も、突出した数字である。

## ■ハワイ変革と二級市民からの脱却

これほど大きな功績と犠牲を払ってハワイに帰ってきた二世たちだが、戦後のハワイは、戦前と変わらず一部の白人が富や政治を独占し、日系人は二級市民であった。

二世たちは「ハワイを変えるためには、まずは政治を変えなければ」とG.I.ビル（復員兵援護法）を利用し大学など高等教育を履修し、弁護士や医師など高度な職業の資格を取った。そして、大勢の二世たちが立候補し、人口の多さもあって次々に当選していった。こうして政治の世界を変えていった二世たちは、自らの銀行を設立することを模索した。

「すべてのハワイの人々のために役立つ自らの銀行を持つこと」。二世たちは青写真を描き、少額で購入できる株を発行し、多くの日系人から支援を集めた。また一世の実業家や日本の住友銀行からの支援も受け、「セントラル・パシフィック銀行」の設立に漕ぎつけた。これにより、日系人の起業も盛んになった。現在、古参レストランやスーパーマーケット、

車の大手デューラー、食料品会社など、そのほとんどは日系人の創業である。

二世の中

で最も人々の信頼を受けたのが、「故ダニエル・K・イノウエ」である。



Daniel Ken Inouye  
屈託のない笑顔でハワイの挨拶のシャカをするダニエル・イノウエ

ダン（イノウエは人々からこう愛称で呼ばれていた）は、第442連隊の創設からのメンバーで、ヨーロッパでの最後の大規模戦闘「チビタベッキア陥落作戦」において、敵陣深くに入り込み敵銃座を破壊し、次の銃座に向かうところで右腕を撃ち抜かれ右腕を失った。この怪我により医者になる夢を諦め、復員後に弁護士の資格を取り、ハワイ州議員となった。1959年にハワイが準州から州に引き上げられた際には、アメリカ連邦下院議員となり、その後、上院に転じ上院議員を永く務めた。2012年に亡くなる前には、大統領継承順位3位にまで上り詰めた。このためハワイ州は、2017年4月、ホノルル国際空港の名称を、「ダニエル・K・イノウエ国際空港」と改称したのである。

## ■『ハワイ日系二世の記憶』制作のきっかけ

私は、2004年からハワイに行くようになったが、ワイキキのあるオアフ島にしか行かなかったために、2007年に初めて、離島の1つであるマウイ島に行くことになった。このマウイ島へのヴァケーションがターニングポイントとなる。

この前年、2006年に私は結婚したが、その際に書を贈ってくれた熊本で書家をしている友人が、若くして癌に罹っていることが判った。癌が判明した時には、すでにステージ4で、余命半年だと聞かされた。しかし友人は諦めることなく、懸命に生きようとした。

そして2007年9月。私は友人に、様子伺いの電話を入れた。しかし、この電話が私の運命を変えたと言っても過言ではない。

友人は電話口で「マウイに行きたいんだ。マウイに行けば、何かあると思うんだ」と言った。

私はこの3日後に、マウイ島へヴァケーションに行くことになっていった。図らずも友人の口から「マウイに行きたい」と

聞いてしまったからには（彼のために何か動かなければならない運命なのだろう）と諦めのような感情が沸き起こり、友人に「実は3日後にマウイに行く。君のために何かできることはないか？」と聞いた。友人も驚き「マウイはおろか、ハワイには行ったことがない」とのこと、私は「ではマウイで書や漢字などがどれぐらいのクオリティで、どんなプロダクトになっており、扱っているギャラリイではどれぐらいのポジションにあるのかを調べて、写真を撮ってくる。帰ったら君に送るよ」とだけ伝え受話器を置いた。

それから3日間は、怒濤の如く過ぎた。私は長期休暇に備えた仕事をこなす傍ら、友人のプロファイルを英語で作成し、マウイ島の熊本県人会にアポイントメントを取った。熊本は、ハワイへの移民を多く輩出した県で、各島に県人会が組織されていたことを知っていたのだ。

そして、マウイ島でお会いしたのが、熊本県人会会長をされていた二世のご夫婦だった。

私は友人のプロファイルを見せながら「友人が熊本で書家をしていること」「癌に罹っておりステージ4であること」「しかしマウイ島での作品発表を夢見ていること」を伝え、もし友人がマウイに

関する書を書き、マウイで個展をする際には、是非とも協力して欲しい旨を伝えた。二世のご夫婦は、私の話を一つ一つ真剣に聞いてくれ、最後にはニコニコとしながら「もちろん喜んで協力させてもらいますよ」と仰った。私は朗報を持って帰国し、マウイの写真とマウイを歌うハワイアン音楽のCDを携え熊本の友人に会いに行った。その際に、なぜマウイなのかと聞いた私に、彼は「アーティストはマウイばい！」と熊本弁でキッパリと言ったのだ。私の決意はそこで決まったと言って良いだろう。

そしてその10日後に、友人は亡くなった。しかし周囲から、彼は最後まで「マウイに行く」と言っていたと聞き、私は友人をマウイに連れて行く想いを新たにしました。マウイの人々に、友人の書を見てもらおう。マウイに憧れた友人の存在を知ってもらおう。そう考えたのだ。

友人が亡くなって3か月後の2008年3月。私は友人の書を携え2度目のマウイの地を踏んだ。もちろん、それまでにマウイ熊本県人会の二世のご夫婦とも連絡を密に取り、遺作展を開く旨を伝え、協力をお願いした。二世のご夫婦は、友人が亡くなったことを非常に残念がりはがら私の行動を評価してくれ、協力を

申し出てくれた。

この遺作展には、遺族も参加した。大黒柱を失くしてから3か月。まだ心の整理も付いていないであろう時期に、初めての海外旅行で、しかも便の良いワイキキ・オアフではなく、飛行機を乗り継いでマウイまで、よく行かれたと思う。しかしこの遺作展で遺族は、マウイの自然と人々に癒されたと言って、とても喜んでくれた。

私は遺族より一日早くマウイ入りし、二世のご夫婦と一日ご一緒した。その際に、現在サポートと交流を続けているKansha Preschool（カンシャ・プリスクール＝感謝保育園）を案内された。

このカンシャ・プリスクールは、マウイの二世退役軍人やその子弟たちの会が主体となり運営されているニセイ・ヴェランズ・メモリアル・センター（二世退役軍人祈念センター）の敷地内にあり、日系人としての意識や（日系人の現在の社会的地位を築いてくれた）二世への感謝を伝える目的で設立された保育園だ。

また、同敷地内にあるアダルト・デイケア・センターのシニアたちとも、毎日交流を行っている。

私は、友人の遺作展でお世話になったお礼として、このカンシャ・プリスクールを日本からサポートしようと考えた。

そうすれば、持続的に関係を築くことができ、日本と日系人との絆が深められると考えたのだ。しかしハワイの二世部隊については、私の周囲の友人などはほとんど知らなかった。ハワイが好きだという知人たちでさえ知らず、日本人は二世を知らないのが現状なのだと気付かされた。「カンシャ・プリスクールを日本からサポートしよう!」と活動する前に、まずはその主旨である二世を知ってもらわなければならないと考え、私は映画『Go for Broke! ハワイ日系二世の記憶』の制作に取り掛かったのである。

## ■「もう一つの日本史」として

2009年から『Go for Broke!』の制作に取り掛かるのであるが、まず最初に考えたのは「この映画を戦争映画にはしない。そして二世ヴェテランたちを英雄視しない」ということである。

戦争映画にしたいと考えた理由は、すでにアメリカやハワイでは二世部隊の映画やドキュメンタリーがあり、それらは戦争物語だけに終始しており、私はそれらに言いようのない不満を持っていた。「二世には戦争しかなかったのか?」と疑問を持っていたのだ。もちろん、二世にとって戦争

は大きなファクトではあるが、それがすべてではないと考えていたし、二世たちの人生が戦争だけでは、彼らの人生があまりにも寂しいではないか、と思っていた。

また、二世が特別な世代であるのは、戦争を経験した世代ということだけではない。何よりも彼らは、親である一世の移民の苦勞を目の当たりにし、あるいは一緒に苦勞をし、それを語れる唯一の世代である。だから私は『Go for Broke!』の中で、二世たちが物心ついた時代、それこそプランテーション時代の日系社会の様子に、映画の三分の一程度の時間を割いているのだ。

アメリカやハワイでは、二世部隊は伝説的に語られ、もちろん二世たちは日系社会から「Our Hero! (私たちの英雄だ!)」と英雄視されている。しかし私は、それもなかった。普通に笑い、泣き、怒るような「人間臭い二世たち」を表現したかった。それこそ、「ハワイに残るもう一つの日本史」的な作品だと自負している。



マウイ取材の様子（二世退役軍人から聴取る松元。2009年4月マウイ島）

## ■今の時代だから伝えたい二世たちの価値観

映画は、2010年にハワイの島々を巡り、31名の退役軍人と3名の奥様のインタビューを収録した。収録時間は、のべ60時間を超える。しかし、初めての映画制作で実績がなく、映画会社や企業を回っても相手にされないため予算が集まっていなかったのだが、それに加えて、2011年の東日本大震災で、全く予算が集まらなくなった。

悶々としながらも、それでもハワイの映画祭への出品を目指し孤独に編集を続けていた。そのため、何度も二度も二世たちの証言を見直すことができた。すると、インタビュー収録の際には気付かなかったいくつかの点が見えてきた。

一つは、誰も日本の悪口を言わなかった点だ。彼らは、親の国である日本から直接攻撃



『Go for Broke!』(映画フライヤー)

を受け人生が変転した。普通だったら、親の国であれ自分たちに危害を加えれば、恨んだり嫌ったりするのが当たり前なはずである。しかし彼らの口からは、ついでそんな言葉は出なかった。

また、インタビューをお願いする際に、私はすべての二世にこう言った。それは、「わたしたち多くの日本人は、貴方たちの親である一世の移民の苦労は、なんとなく知っている。しかし、貴方たち二世の違ったカタチの苦労は、ほとんどの日本人は知らない。私は、同じ根っこを持ち同じ血を持つ日本人として、貴方たちのことを知らないのは『恥』だと思う。だから日本人に、貴方たち二世のことを伝えたいんだ」と。

二世たちは、それを黙って聞き、そして口を開いてくれた。この『恥』が彼ら二世の琴線に触れたのだと思う。『恥』

は、彼らの物事を判断する基本にある。「家の恥にはならない」「親に恥をかかせられない」。これは、やはり日本の明治の価値観を持った親に育てられ、毎日1時間通った日本語学校で教えられた「修身」に起因するだろう。実際、彼らの多くが「修身」を口にし、英語では「Obey」(従属や奉ずると言った意味がある)と言った。

実際に、一人の二世が口にした軍への志願の理由はこうだ。「貧乏だったが、これまで何不自由なく育ててくれた親や日系社会に対し、恩を返すのは当たり前だと思った。だから私は軍に志願した。それは自然な考えだった」。

また別の二世はこう言った。「一世の親の苦労からしたら、私たちの苦労は苦労のうちに入らない」と。

それに対し私は、「でも貴方たち二世は、命をかけたじゃないか。それこそ死ぬ思いをしたじゃないか」と反論したのだが、「いや、それでも親の苦労からしたら、私たちの苦労は苦労ではないよ」と静かに諭されてしまった。

私はこの時、収録を終えていて良かったと思った。何故なら、この言葉を聞いた時、涙があふれそうになったからだ。その状態では、収録カメラのファインダー

がキッチンと覗けない。

何もこの二世の価値観が特別だとは思わない。日本でも戦前まではそうだったのではないかと思う。私たち日本人は、先の敗戦で、すべてを否定してしまったように思う。それは、失くしてはならない価値観まで捨ててしまったのではないか。「恩」「恥」「修身」そして「Obey」。日本人が失くしてしまったものを、二世から学ぶことができるのではないかと思っている。

(2018年12月6日・公開フォーラム)

#### 筆者略歴(まつもと ひろゆき)

1964年宮崎生まれ岐阜育ち。永く広告代理店で広告映像に携わり、主な仕事としては「BMW」「オージービーフ」「Red Bull」「De'Longhi」など。また沖縄にも造詣が深く、環境問題や音楽文化の執筆も多数。主な共著に『オキナワドリーム』(光文社知恵の森文庫)、『沖縄ロハス』(山と溪谷社)など。

現在、『Go for Broke! ハワイ日系二世の記憶』の第2弾として、『Okagesesama deーハワイ日系女性の軌跡』の制作に取り掛かっている。お問い合わせは、TEL 090-3501-1249(松元)まで。